
哀子物語

ごはんライス

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀子物語

【Nコード】

N0919M

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

20枚です。河野夜兎先生とはまったく関係ありません。ということもありません。うーむ。名誉毀損にならんかね。

哀子の勤務する第4工場は愛知県にある。緑の豊かな田舎にあり、いろいろなものを製造している。ガンダムの部品や、藤子プロに頼まれてドラえものの秘密道具まで作ってる。実にオールマイティだ。哀子は一応社員であるが不況のためそんなに給料はよくない。仕事はむちゃきつい。本社の人間はそろばん勘定ばかりで現場の苦労が全然わかつとらんでグチグチゆうし、パートのおばちゃんはずぐにさぼる（まあ、危険手当が五円じゃ仕方ないかなあと思うが、哀子は仕事が増えてかなわん）実に「コノヤローツ」という感じ。街へ出て銃を乱射したいなんて危険思想が頭をよぎることもしばしばでもお客様（特にアニメ関係の仕事が多いから子ども客が多い）から応援のレターをもらうと涙が出てきて「よし！やるぞ！」という気分になる。

しかし、先週から、第4工場が一時閉鎖になってしまった。工場で製造していたどこでもドアを使い犯罪事件が起こり責任をとらされたのだ。

一応、どこでもドアは18禁である。子どもは悪いことに使う。のび太を見よ。しずちゃんのを裸を見るために使う。大人も遅刻しないようにとか、天候が荒れて飛行機の運行がストップしてしまった場合だとかに使用を限られる。

しかし、悪い大人が増えて、あるおっさんがどこでもドアを使い女性の部屋に侵入し殺害するという事件が起こってしまったのだ。

哀子はしばらく自宅で過ごさなければならなかった。社員なので休み中生活費くらいは出るが退屈でならない。早く仕事がしたい。

哀子はケータイをぼちぼちいじっていた。

インターネットを検索していたら「小説家になろう」というサイトを発見した。小説を投稿して発表するサイトで、何万人と閲覧してるらしい。

「面白そうねえ」

哀子は児童擁護施設にいたときを思い出した。あの頃は施設のみんなとわいわい楽しくやっていたが、たまに親がいなくてさびしかった。

そんなとき、よく図書館へ行き、物語の世界にトリップし癒された。哀子自身も文章や絵を大学ノートやチラシの裏に書きまくり遊んでいた。

そのときのわくわく感を思い出し、しかも利用は無料だということも手伝って哀子はすぐにユーザ登録した。

哀子はあれこれ考えた末、第一作は「お尻くん」にしようと思った。これは哀子が小学生の頃に描いていた漫画の主人公で当時雑誌で連載されていたギャグ漫画のキャラクター、ニコチャン大王の影響を受けている。

顔が尻になっていて、顔から手と足が突きだしてる一等身のキャラクターだ。

とにかく下品。緊張すると顔の中央にある尻の穴からうんこをぶりぶりするのだ。

哀子は思い出しながらノリノリでケータイを打った。

ペンネームは本名の河村哀子にしようかどうしようかと悩んだが、恥ずかしいのでやめた。適当に、うなぎの蒲焼きが好きなので「うなぎや」にした。

そして、哀子いやうなぎやは、食べるのも眠るのも忘れケータイを打ち続け、ついに「お尻くん」が完成した。こいつは大傑作だ。何回も何回も読み返し思う。特にクライマックス、お尻くんときんたまちゃんが戦うシーンなど自分で読んでて震えてきた。

うなぎやは、ときどきしながら投稿ボタンを押した。

「あーあ。ついに投稿しちゃったよ。読者は果たして楽しんでくれるかしら」

しばらく不眠症が続くうなぎやだったが、その日はぐっすり眠れた。夢の中でうなぎやは、文学賞の授賞式で賞状を受け取ったり、ファンにサインを求められたり大変だった。

「にひひひ」

にやけながら眠る不気味なうなぎや。

そして、朝目覚める。

「いかん遅刻だ。あ。休みか」

うなぎやは顔を洗い、トーストを焼いてテレビの星占いを見ていた。

「そうだ。お尻くんの感想来てるかなあ」
うなぎやはケータイを握りしめドキドキしながらサイトを開いた。

下品すぎる！作者は小説をなめてるのか！こんな下品なものを子どもに読ませるつもりかアホ！

(竹山たけこ、主婦)

下品すぎて笑えません。作者さんは最低のくず野郎ですね。うんことかしつことかバカじゃないの？

(キムチ、小学生)

豆腐の角に頭ぶつけて死ぬ。

(ぷりお、左官屋)

最悪な作品でした。警察に訴えますよ。子どもが真似したらどうするつもりです？最低の大人ですね。なにが、うんこ爆弾だ。死ね。

(茶目子、OL)

うんこのことばつかで全然面白くない。お尻くんで題名がすでにセ
ンスない。才能がないよ。生きてる資格がないよ。

(プリティ鬼瓦、女子高校生)

「ひいひいひいひいひいひいひいひい」

うなぎやは目を回してしまった。

うなぎやは落ち込み寝込んでしまった。

包丁を振り回す読者に追いかけられる夢を見て、びっくりして目覚めた。

窓の外を見ると夕暮れだ。カラスがかあかあ鳴いている。

「ああ。だいぶ寝ちゃったなあ」

うなぎやはもうサイトを開くのもいやだったが、それじゃ何か悔しいなと思い、勇気を出して開いた。

「あつメッセージがきてる。誰かな」

うなぎやはあわててメッセージを開封した。

題名：めちゃおもろかった！（送信元：中華そばラーメン）

うなぎや先生、はじめまして。中華そばラーメンと申します。

さて、先生の作品「お尻くん」を読ませていただきました。

めちゃくちゃ面白いですね！あまりに下品で腹痛いです。

まあ批判が多いのはそれだけ読者の気持ちに引っ掛かったということでしょう。

これからも、めげずに「お尻くん」書いてください。

楽しみにしてます！

うなぎやは、じーんときてしまった。

「うむむむ。これだけ応援してくれる人がいるなら書かなくちゃいけない。それにしても、ぷっ。中華そばラーメンで変な名前。中華そばもラーメンもいっしょじゃん」

うなぎやはちよつと元気が出てきた。

そのとき、ケータイにメールが入った。

「あ。猫アホだ」

猫アホというのはうなぎやの長年の親友でもちろんあだ名である。
猫のことがアホみたいに好きなので、そう呼んでる。家で三びきも
飼ってる。

哀子ー！

次郎くんたちと闇鍋やるからおいでー！

「わあ。やったあ」

うなぎやはつきつきして、着替えて、アパートを出た。

うなぎやが、猫アホの家に着いたとき、ドアは開いており、中はすでに暗かった。しまった。遅れたか。もう闇鍋始まってたか。

真つ暗な部屋に入ると、うめき声が聞こえる。

「う、うう。哀子おお」

む。この声は猫アホ。

うなぎやがあわてて電気をつけると、そこには血だらけの猫アホと次郎ちゃんとポンチョが倒れていた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

こ、これはいったい???????

うなぎやはいやな汗が出てきた。

窓から冷たい風が吹き、カーテンがひらひら揺れていた。

「むう。何ということだ。惨殺事件が」

うなぎやは、猫アホを抱えた。

「猫アホー！猫アホー！」

「うう。わたしはもうだめよ」

猫アホはすでに虫の息であった。

「死んじゃやだ！死んじゃやだ！」

うなぎやはわんわん泣いた。

猫アホたちは実はうなぎやにドッキリをしようとしていたのだ。わざと死んだフリをしていたのだ。

「猫アホー！猫アホー！」

あまりにうなぎやが真剣になって、猫アホはちょっとおかしくな
って吹き出しそうだったのでそろそろネタばらししようかなと思っ
た。

うなぎやは頭がおかしくなって、台所へ走り出した。

「あたしも死ぬ！」

そして包丁を取り出し、自分の腹を裂いた。

「うぎゃああああああああああ」

「哀子！！！」

うなぎやは目を白黒させている。

「え??????」

「哀子！哀子！」

うなぎやはそのまま死んだ。

うなぎやの葬儀には、あの中華そばラーメンも来ていた。中華そばラーメンは実は哀子の工場の上司でたまたま「なろう」でお尻くんを発見し文体から、「あつこれは河村くんに違いない!」と思い、メッセージを送ったのだ。

これからどんな作品を書くのかなと楽しみにしていたのに死んでしまっなんて。。。

みんながしくしく泣いてる中、中華そばラーメンはお尻くんのことを想像し、ちよつと笑いがこみ上げてきた。

「こ、これはまずい。こんな真面目な場で爆笑モードになってきた」そんなとき、どこからか声がする。

「ラーメンさん。今からうなぎやを助けに行きますよ」

「??????」

中華そばラーメンは辺りをキョロキョロ見渡すが、それらしい人物はいない。

しかし、声の主が誰かすぐにわかった。

「お尻くんか!」

「ビンゴ!」

なぜわかったかというと、中華そばラーメンが思い浮かべたお尻くんアニメ化の際のお尻くんの声と同じ声だったのだ。

すうと、中華そばラーメンの前に、お尻の顔から手と足を突き出したお尻くんが現れた。

「ひっ」

まわりの参列者は全然気づいてない。

「ラーメンさんにしか僕のことは見えないんですよ。レッツミニョージック!」

お尻くんが指をぱちんと鳴らすと、どこからか、うなぎやが生前好きだったチキンボーイというバンドの名曲「おとがめガール」が流

れてきた。

「おつとがめガールがあ、イエイエイ、イエイエイ」
お尻くんがノリノリで踊ってる。

中華そばラーメンは「葬儀中に踊るな!」と叫んだ。
すると会場はしいんとなり、参列者が一斉に中華そばラーメンをにらんだ。

「ひ、ひい。ごめんなさい」

お尻くんは、ラーメン早く僕の背中に乗れと叫んだ。

「う、うん」

中華そばラーメンを背中に乗せたお尻くんは時速百キロで飛び、葬儀場を飛び出し、くるくる空を舞った。

「うええええ。気持ちわるうつつ。どこ行くのおおおお」

「もちろん、地獄さ!」

7 (前書き)

うつむ。どついう展開にしようかねえ???

どこをどう飛んだのか気づけば眼下にえらい景色が広がっている。鬼にペンチで舌を伸ばされているおっさん。巨大な石を運ばされ、落としたら、鬼に棍棒でぶたれている女。鬼が背中に乗り腕立て伏せをやらされているちびっこ。「重いよう。苦しいよう」「ほれ。1、2。1、2」

近くにある火山は噴火していて、空は黒い。まさしく、地獄って感じだ。

お尻くんに乗った中華そばラーメンはごくごく基本的な質問をしてみた。

「なぜ河村くんは地獄に行ったんだい？別に悪い子じゃないよ」

「僕を完結させなかったからさ。僕を途中で放り投げて死んだからさ」

ふええええ。そんなことで地獄へ？

小説つうのは恐ろしいな。

ところで河村くんはどこにいるんだろう。

「あ。いたぞ。おいラーメン。下を見る」

いつの間にかため口聞いてやがるなお尻くんめ……。

と思いつつ、中華そばラーメンは下を眺めた。むう。確かに河村くんがいる。

てか、なんで素っ裸！

素っ裸で走ってる。うはあ。河村くんてけっこうボインやんけ。あつ水風呂に飛び込んだ。

「つめてえ！気持ちいい！」

水風呂から上がると河村くんいやうなぎやいや哀子、なんじゃい、うなぎやで統一しよう、うなぎやが走って小屋に入る。

「お尻くん。あの小屋は何だい？」

「サウナ室さ」

ああ。なるほど。それで水風呂に入っていたのか。

てか、なんなんだよ、それ！

うなぎやはサウナと水風呂を行ったり来たり繰り返したあと、自販機でサイダーを買って飲んでいた。

「ういーうめえ！」

中華そばラーメンとお尻くんはうなぎやの前に降りた。

「お、お尻くん！それに、サブリーダーまで！」

「や、やあ。河村くん。その意外と胸が」

「うなぎや、胸でけえな」

「いやん！」

うなぎやはバスタオルで体を隠した。

鬼がやって来て「マツサージの準備できました」と言う。

「ええっもう?」

「はい。早く寝てください」

「う、うん」

うなぎやが寝転ぶと、鬼たちが一斉にうなぎやの身体をくすぐり始めた。

「こちよこちよこちよこちよ。」

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

こいつは地獄だ!

うなぎやは一時間くらいくすぐられ、ぐったりしてしまった。

「す、すごいね」

「かわいそうに」

うなぎやはタバコを吸いながらビールを飲んだ。

「あっ河村くん酒とタバコはだめだよっ病院で言われたろっ」

「うるせえっもうあたしゃ死んでるから関係ないっつーの! ひっく」

お尻くんはうなぎやのほっぺたを叩いた。

ビール缶が落ちて転がった。

「な、なにすんのよ! お尻くん!」

「お前、『お尻くんと現実主義者』はどうするんだ!」

「!!!!!!」

中華そばラーメンは顔が「???」になってる。

無理もない。「お尻くんと現実主義者」はうなぎやの頭の中にだけある新連載小説の題名なのだ。

鬼が笑いながら言う。

「はっは。じゃあ決定。お前のこれからの仕事は「お尻くんと現実主義者」を完成させることだ」

「ええええええええ。なにそれえええ」

「文句ある？」

鬼が棍棒を振るうので、うなぎやは仕方なしに「はい」と答えた。

「でも、あたし、うなぎやという名前やだなあ。適当につけたんだもん。何か新ネームがいいなあ」

「そうだねえ。実はいい名前があるんだ」

「どんなの？」

「河野夜兎というのはどうだい？」

「河野夜兎????」

お尻くんによると河野夜兎という女性は愛知県にある工場に社員として勤務しており「なるう」で執筆していたのだが（うなぎやと同じだね）去年、自爆テロに巻き込まれ死亡したというのだ。

「そつかあ。追悼的な意味かあ」

「そういうこと」

「わかった。あたし、河村闇鰻にする!!」

「ええええええええええ」

お尻くんと中華そばラーメンは同時に、「人の話聞してるの!」とツツコンだ。

「だって、そんな縁起が悪い名前やだよ。あたしは今日から、河村闇鰻。これに決定」

まあいいかあ。と二人は思う。うなぎや、いや闇鰻が執筆するならそれでいい。

お尻くんは、中華そばラーメンと闇鰻を背中に乗せ、飛び上がった。「あん。サプリーダー。お尻にかたいの当たってる」

「ごめん。ごめん。はあはあ。河村くん、ボインだね。はあはあ
お尻くんは中華そばラーメンを振り落とした。
「うわあああああああああああ」

「サブリーダあああああああ」

どんどん落下していく中華そばラーメン。

「うわああああ。たすけてえええええええええ」

中華そばラーメンのボディが屋根を突き破った。

「ぐはっ」

布団で寝ていた吉野卓造（84歳）の腹の上に激突。

中華そばラーメンは失神し、卓造も失神した。

それからしばらくの間、中華そばラーメンはお詫びに卓造の家でお手伝いをする事になった。卓造の肩をもんだり洗濯をしたり料理を作ったり話相手になったり、卓造は奥さんを亡くしたばかりだったのですごく助かった。

卓造はある日食卓で、中華そばラーメンに質問してみた。

「お兄さんはなんで墜落してきたんだい？もぐもぐ」

中華そばラーメンはやつと思ひ出した。そういえば、河村くん！

急いでケータイを取り出し、「なろう」を開いた。

すると、あの「お尻くんと現実主義者」が連載されていた。

中華そばラーメンは連載第一回から読み始めた。

すぐに夢中になってしまった。むちゃくちゃ面白い。

第一回 お尻くん、現実主義者に会ったの巻

お尻くんは、お尻の顔から手と足を突き出した一等身のキャラクターだ。緊張すると顔の中央にあるお尻の穴からうんこをぶりぶりしてしまう。

今日は寝坊した。お尻くんは食パンをお尻（顔）にはさみ走り出す。

「急げ。急げ。遅刻だ」

ばたーん。

「いててて」

何ということだ。誰かとぶつかってしまった。

「痛いわね！」

「す、すみません！」

お尻くんはぺこりと頭を下げた。

その誰かを見ると、その子は、ショートカットのかわいい女の子であつた。

「あ、あんた。人間？」

「お尻くんです」

「お、お尻くん????」

女の子はびっくりしてる。そりゃそうだ。こんなお尻人間を見れば誰だってびっくりする。

「顔、お尻やん！」

「そうですけど？」

お尻くんはちよつとむっとした。当たり前じゃないか。ぼくはお尻くんなんだもの。

「あ、あたしは信じてないわよ。あなたはフィクションの世界の子よ」「そう思いたいなら思えばいいよ。じゃ、ぼく急ぐから」

お尻くんが立ち去ろうとすると、女の子がわめく。

「あたし遅刻しちゃう！あんたのせいよ！お尻人間！」

「ちっしょうがねえな。おい、お前、ぼくの背中に乗れ」

「えええ。やだあ。お尻の背中になんて」

「ガタガタぬかすな！小娘！」

お尻くんがすごい勢いで怒鳴ったので女の子は仕方なしにお尻くんの背中に乗った。

「スピード出すからしっかり捕まってなよ」

「う、うん。どうする気？」

お尻くんは女の子を乗せ、飛び上がった。

「ひ、ひやあああ。何これええええ」

「そっぴや、お前、どこ行くの」

「私立聖パイナップル女子高よ。ひえええええ」

「よしきた」

お尻くんはエンジン全開ですごいスピードを出した。

「ふえええ。こんなのウソよ。フィクションのことよ。ひえええええ」

「ふん。勝手に言ってる」

つづく

第二回 お尻くん、教壇に立つの巻

女の子を乗せたお尻くんは聖パイナツプル女子高校の校門の前に降りた。お尻くんは肛門。それだけは言いたい。

「あ、ありがとね。でもあたし、まだあなたの存在信じたわけじゃないから！」

「ふん！言ってる。この現実主義者め」

女の子が校門に入ろうとすると、肛門たるお尻くん（しつこい）もついて来る。

「あ、あんたはもう帰っていいのよ。お尻人間」

「そうはいかない」

「なによ。あんたストーリー？警察呼ぶよ」

「ぼくは今日からこの高校に赴任してきた教師だ」

「ええええええええええええええええ」

教卓の上にお尻くんが立つ。

校長先生が説明する。

「ええ。担任の大竹先生が野球賭博で逮捕されたので、今日から新しい先生が来ました。紹介します。お尻先生です」

「どうも。お尻です」

教室内がざわめいてる。「うわ。お尻がしゃべった」とか「あれ、何。人形」とか。

女の子がはらはらして、心の中で叫ぶ。あいつは空も飛ぶのよー！

校長先生がお尻くんに尋ねる。

「お尻先生は、趣味は何ですか。トイレを磨くことですか」

「バカにしないでください校長。見た目で人を判断してはいけません。ぼくの趣味は将棋と釣りです」

「ごめんね。教える教科は何ですか。ひょっとして、下水道学ですか」

「ふざけないでください。何ですかそれは。日本史です」

「ええ。ほかにみなさん。お尻先生に質問ありますか」

女の子が手を挙げて聞いてみた。

「はい。ロリ華くん」

「あのその。お尻先生は、うんこはどこからするんですか」

「むかつぽくをからかっているのかね」

「いえその」

みんなが実に見たかかった質問である。

「もちろん、お尻からですよ」

おおおおおおおおおお。教室内がざわめいた。

「ぼく、緊張するとすぐもらしちゃうんですよ」

女子が一人、お尻さんに近づき、胸を揺らせて見せた。むっちゃボイン！

お尻くんは興奮してきて、しかしぼくは教師である、という葛藤からくる苦悶から変な汗が出てきた。

「こ、こら。やめないか」

女子はしつこく胸を揺する。

「もうだめだ」

ぶりぶりぶりぶりぶりぶり。

つづく

14（完結）

これはめちゃくちゃ面白いと思い、感想を書き込むのもまどろっこしく、直接口で言おうと思い、中華そばラーメンはじいさんの家を飛び出し走った。

「はあはあ。はあはあ」

二丁目の交差点辺りに来たとき、中華そばラーメンの後ろに何かぶつかった。

「気をつける！おっさん！」

自転車が去っていった。

「いててて」

中華そばラーメンは完全に体を痛めた。

「チキショー何ということだ。急いでるのに」

中華そばラーメンが地べたに座り途方に暮れていると、背後で笑い声。

「む。その声は」

間違いない。アニメ化に際して思い浮かべた声と同じだもの。

「お尻くん！」

「はっはっ。ラーメンはアホだなあ。哀子に告りに行こうとしたのかい？」

「ちっちげーよ。お尻くんが面白かったって言いに行くだけだよ！」

「ふうん。怪しいなあ。独身女のアパートにねえ」

「お尻くんのバカ！お尻くんのエッチ！」

「まあそういうことにしといてやるよ。とにかく、ラーメン。ぼくの背中に乗れ」

「う、うん。ありがと」

その頃、哀子は布団の中で、また感想にうなされていた。

下品！下品！汚い！

（プリティ鬼瓦、女子高校生）

教育委員会に訴えます！

（竹山たけこ、主婦）

お金貸して！

（琴光喜、大関）

お金貸してください！！

（大嶽親方）

「うーん。うーん。ただいま無職なのでお金ないよー。うーん」

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0919m/>

哀子物語

2010年10月9日20時14分発行